

日本語の「は」と中原中也の「一つのメルヘン」 Understanding a poem by Nakahara Chuuya

岩垣 守彦
Morihiro Iwagaki

フリー

Freelance
miwgqui@a.email.ne.jp

Abstract

A poem must be understood not by the help of biographical information but by a poem itself. This is an example of such understanding by using a new categorization in natural language proceedings as linguistic conversion is done by surface information of words.

Keywords — poem surface structure linguistic conversion natural language proceedings

1. はじめに

年を取ると動きが鈍くなる。少し前までは、まだやり残したことの多さに焦りを感じて気ぜわしかった。しかし、残りの年月が一桁と予測せざるを得なくなると、あきらめがついたのか、遅い動きが楽しくなる。映画も小津の『秋日和』とか『彼岸花』とか、現代のものなら『舟を編む』とか『蝉しぐれ』『小さなうち』など、時間がゆっくり流れるものを繰り返し見ることになる。若いころには、一冊でも多くと小説を読み飛ばしたものであるが、今では、小説は覗き見趣味のような後ろめたさを感じて読むことをためらう。色恋沙汰も能や歌舞伎のように「模様」になると安心であるが、小説は生々しい。それで言葉との付き合いは詩・短歌・俳句ということになる。電車に乗るときに持つのは堀口大学が素手で異言語の詩と対峙して母語化した訳詩集『月下の一群』（岩波文庫）である。活字は大きく、一語一語感じながら考えながら読むことができる。「われ等やがて肌寒き闇の中に沈み入らん、・・・」（ボードレール「秋の歌」p. 288）を読むと、大学二年の秋に、煉瓦造りの午後の教室で、窓から斜めに差し込む陽を受けながら、村松剛さんにこの詩をフランス語の原語で読まされ評釈を求められたつけ、と言葉の周

辺を思い出す。島田謹二さんに比較文学の手ほどきを受けているので、ああ、そうそう、立原道造はこの詩を利用して「また落葉林にて」を書いたんだった、と思い出す。

詩を読むのは詩人が創った表現と自分の内的資源と勝負する楽しさである。その場合、詩や詩人に関する伝記的情報はむしろ詩の「精読（エクスプリカション・ド・テキスト）」の邪魔になる。それでも、言葉の表層情報ではわからないところに出っくわすと、つい伝記的な情報に助太刀を頼みたくなるのも人情だ。「トタンがセンベイ食べて／春の夕暮は穏やかです」（中原中也）などと立ち合うときには特にそうである。しかし、伝記的情報に助けてもらうことは詩に対してフェアでないような気がする。どんな詩もプロなら感覚で一気に書いて理性で直している。詩は感覚的納得と論理的納得に基づく統合的表層情報である。それなら、言葉の表層情報の組み合わせを感知して自分の内的資源で勝負したい。したがって、普段から内的資源の補充には心を配る。

何年か前に人工知能学会の全国大会が山口で行われたとき、中原中也の育った空気に触れたり、山頭火の歩いた道をたどったりしたくて、一日早く湯田温泉駅に降り立った。その日は、中原中也記念館に入り、また、路地の隅に建っている中也の詩碑や山頭火の句碑（錦川通りにあるのは「ちんぼこもおそろも沸いてあふれる湯」）を読み、そのまま「山頭火通り」を、鉄道の線路を挟んで反対側の山裾にある龍泉寺まで歩いた。言葉の周辺はいつも豊かにしておきたい。それで、どこに出かけてもなるべく歩くことにしている。ロンドンでもパリでも街を歩く。できるだけ乗り物を使わ

ない。乗るなら、バスか路面電車にして、街を見て、風に触れて、音を聞く。そして、食べて吞んでみる。それは、言葉の情報を自分の感覚の底に沈めて、詩に対峙した時に、自分語で納得のいく言い換えができるようになりたいからである。

2. 前衛表現のための論理と認知

2-1 作者全知の読み

小説や詩を読むとき、普通、作品の周辺を調べたりしない。調べたくなるのは、作品に惹かれながら、どこかわからないところがある場合、言い換えるなら、自分語に変換して納得することができない場合である。中原中也の「一つのメルヘン」は調べたいという誘惑にかられる詩の一つらしい。

秋の夜は、はるか彼方に、
小石ばかりの、河原があって、
それに陽は、さらさらと
さらさらと射してゐるのであります。

と詩は始まる。「秋の夜」なのに「陽がさらさらと射す」とはどういうことか。「小石ばかりの河原」って何。言葉の不可解な組み合わせが不思議な魅力を醸し出して、題も「一つのメルヘン」だし、何か異次元の幻想の世界が描かれているのかなと思ってしまふらしい。ネット上には、この詩に対する勝手読みが星の数ほど見られる。詩は、詩人の言葉と対峙して読み手が勝手に自分の世界を創るものであるから、読む人によってそれぞれ異なる世界が創造されるのは当たり前で、どれが正しくてどれが間違いということはない。実際、編集者というプロの篩にかけられて出版されている読みも一様ではない。

小林秀雄は「中原中也の思ひ出」（昭和24年6月執筆、雑誌『文芸』8月号掲載）でこの詩に触れている。「中原の心の中には、實に深い悲しみがあって、それは彼自身の手にも餘るものであったと私は思っている。（中略）彼はそれをひたすら告白によって汲み盡さうと悩んだが、告白するとは、新しい悲しみを作り出す事に他ならなかったのだ

ある。」(p.286)と彼は書いて、最後に「彼は悲し気に放心の歌を歌ふ。川原が見える。蝶々が見える。だが、中原は首をふる。いや、いや、これは「一つのメルヘン」だと。私には、彼の最も美しい遺品に思はれるのだが。」と言って「一つのメルヘン」を引いている。小林秀雄は、簡潔な文章で中原中也を語り、「一つのメルヘン」を精読したことを「川原が見える。蝶々が見える。」とさりげなく示している。

中原中也の研究者たちがこの詩をどのように解釈しようとしたかは、大岡昇平の『中原中也』（講談社文芸文庫）の中に手際よくまとめてある。その中には「小石ばかりの河原」を「水無河原は恰三が葬られ、現在は中原自身も眠っている山口市吉敷の中原家の墓の傍にある河原」(p. 259)ととらえ、「仏教的な「賽の河原」と思っているのではないかと推測している。」(pp. 260)人（下関の梅光女学院短期大学の佐藤泰正氏）もあると紹介し、さらに「これは中村稔が早くから指摘していたところだが（『一つのメルヘン』をめぐって、『古典の窓』昭和34年1月号）、佐藤氏はこの「賽の河原」のイメージの「土着性」に、中原を遂に信仰に達せしめなかった「魂の暗部」を見ている。中原の「精神というものは、その根拠を自然の暗黒心域の中に持つてゐる。……精神が客観性を有するわけは、精神がその根拠を自然の中に有するからのことだ」（『芸術論覚え書』）という句を引用し、その生と歌が「自然にふかく身を浸していること、浸すべきであること真率に深く感じていた。中原にとって伝統とは、土着性とは、この自然の属性の一部に他ならなかった」と結論している」(p. 260)と引用・解説している。大岡昇平自身は、上の解釈に反発して

しかし「一つのメルヘン」に限っていえば、私はここにはあまり伝統的なものも仏教的なものもないと思う。固体のような光がさらさら射している水無河原に一匹の蝶が来てとまる。それが飛び去ったあと、こんどは自然の水が流れ出す——これは一つのドラマであり、むしろ一つの異教的な

天地創造神話ではないかと思われる。

と主張している。このほかに、インターネットで調べると、ある人は「ダダイズムの延長上に創り出された幻想世界であり、原初的な自然を舞台とした世界」と言う。また中には、分析批評を駆使して読んでみせてくれている人もいる。

しかし、小林秀雄を除いて、これらの読みはいずれも詩を読んでいない。詩を介して詩人の心の内をさぐろうとするものである。それはそれで構わないのであるが、本来、詩を読むということは、詩人の伝記的な情報を参照したとしても、言葉と言葉の組み合わせという表層情報を読んで理解することであり、その本質は「詩人語を読者語に言い換えて納得すること」である。これは異言語を母語に、母語を異言語に言い換えて納得することを目指すコンピュータによる機械翻訳と同じである。

2-2 言葉の表層情報を読む

日本には、昔から、言葉の表層情報を穿つように読んで理解する「読書百遍」という対処法があった。これはフランス流の「エクスプリカシオン・ド・テキスト」(精読)」と相通じるものであるが、いつの間にか忘れられている。小林秀雄はいつだったか「読書百遍という様な言葉が、今日、もう本当に死語と化してしまっているなら、読書という言葉も瀕死の状態にあるといっていいいでしょう」と書いていたが、気が付いてみると、読書は発信者にすり寄ってその仕掛けを解明し、真意を伺うことを目指す奴隷になってしまっていた。たとえば、ジョージ・スタイナーという優れた受信者でも、『G. スタイナー自伝』(ERRATA—An Examined Life, 工藤政司訳・みすず書房)の中で、「読む」ということに関して、「文学の場合で言えば、言語的・歴史的知識が備わり、多義的でたえず変容する言語の性質に理想的な感受性をもち、鋭い直観力を駆使して感情移入のできる優れた読み手でも、彼らはしかし原作に「肉薄した」にすぎない。説明された詩や散文の究極の生命力、時

間に逆らうそれらの力、は手つかずのまま残る。どんな解釈もその対象には匹敵しえない。分析と「解剖」や、パラフレーズないし感情描写によるどんな再叙述も原作を置き換えることはできない」(p.29)とその限界を嘆いている。

しかし、発信者と受信者とはそれぞれ異なる「脳内資源」を使うのであるから、「読む」ということは、発信者が発信者の脳内資源を使って提示した発信者語の情報を、受信者は受信者の脳内資源で受信者語に変換して理解するということである。したがって、発信者と受信者の関係は対等で、等価変換規則にしたがって言語情報を交換し合う異言語同士ということである。それは、たとえば、英語圏の人が「君のことは忘れない」と伝えるつもりで英語符牒列で I love you forever. と言ったとき、日本語圏の人が「日英等価変換規則」にしたがって日本語符牒に変換して、「僕はいつまでもあなたを愛しています」と理解するようなものである。その言葉が「さようなら」を意味すると解釈できるかどうかは受信者の内的資源の厚みによる。

発信者から受信者を解放するという動きは、いわゆる「新批評」(1940～50年代のアメリカ)という形で現れたが、言語情報に対するこのようなとらえ方は20世紀の初め頃、すなわち、コンピュータが実用化されはじめた頃にはすでに十分に意識されていた。したがって、この動きは百遍も読まないで即座に表層情報だけで言語を処理するコンピュータ時代を予見したものではないかと思われる。

「新批評」のバイブルと言われたエンブソン(William Empson)の『曖昧の七つの型』(Seven Types of Ambiguity)が出たのが1930年である。この著作はゲシュタルト心理学を文学的に援用した師リチャーズ(I. A. Richards)の『文学批評の原理』(Principles of Literary Criticism, 1924)の延長線上にあるが、「美は作品に内在するものではなく、聞き手・読者の経験である」(『美学の基礎』(I. A. Richards, C. K. Ogden, J. Wood: The foundations of Aesthetics, 1922)という問題意識は、夙にサント-

ブーヴ (Sainte-Beuve, 1804-1869) に始まり、ルグイ (Emile Legouis)、カザミアン (Louis Francois Cazamian)などに引き継がれたフランスの伝統的なエクспリカシオン・ド・テキスト (精読) の延長線にあるものである。「新批評」の人々は「作品」を「有機的統一」と考えて、「自己完結的美的世界」ととらえたが、これは現実と符牒の内容との直接的つながりを信じる 19 世紀的實在論からの脱皮であった。つまり、「作品」を発信者からも受信者からも独立した自律的世界ととらえようとしたのである。

その結果として、符牒の時代性をも無視した凡庸な批評家・研究者による「勝手読み」が流行することになったが、詩心ある優れた新批評家たちは作品を発信者から切り離しながらも、新批評の欠陥を修復することになる次の時代の読み方——神話原型批評や構造主義的批評——をすでに内包させて読んで、作品の個別性と普遍性に同時に迫っていた。すなわち、作品自体の内的構造に作品の決定的要因を求めると同時に、その決定的要因を広い文化的文脈の中に求め、作品を生み出す母胎としての文化の原型(原神話)と作品(派神話)との距離を作品の評価に組み込み、作品を普遍的な構造の変形・異形と見ていたのである。

この方向は神話原型批評として現れるのであるが、その代表格はカナダの N.フライ (Northrop Frye) であった。彼は文学を作品固有の条件の中だけでなく、文化現象の一形式として、広い文化的文脈の中でとらえ、ある文化の象徴的表現の中に繰り返し現れるテーマやモチーフの類に関心を寄せた。

一つの作品は一つの原型を表現する様々な表現の一つととらえるのである。これは、個々の作品の意味の解明よりも作品を構成する符牒の体系、さらに符牒を生成する文化現象の普遍的な構造そのものに確定性を求めて探求する構造主義とより合わさって行く、と同時に、比較神話学の発展とともに神話・民話の研究と重なっていくことになった。つまり、1960 年代以降、思考の原点としてのプラトンの「イデア」論、人間の心の原点とし

てのユング (C. G. Jung) の「原初イメージ」(primordial images) や「集団無意識」(the collective unconscious)、また文学の原点としてのフライ (Northrop Frye) の「原神話」、や 符牒の原点としてのノーム・チョムスキー (Noam Chomsky) の「普遍文法」(Universal Grammar) などの学説が、普遍性という点で共時的に並び、相乗的に統合されていったのである。

これを文学に限定すれば、発信者の「書くという発信者語への創作的翻訳行為 (原型模写)」は、人間の原初情動・衝動の「普遍の原型」と同化し、「物語原型 (原神話) + 原初的事象展開」となり、「類比照合」と「論理的推論」に基づいて符牒化され作品化される、と同時に、その作品は発信者から切り離されて人類共通の文化基盤から成る共同体の財産となるのである。したがって、受信者の「読む」という行為は、「物語原理 (物語原型・原初的事象展開)」と「符牒 (イメージ) の組み合わせ規則 (文法)」という共通の基盤の上で、「発信者語を受信者語に翻訳して納得すること」となる。

2-3 表層情報の等価的处理

コンピュータによる機械翻訳は、人間が行っている「発信者語を受信者語に等価的に言い換えて納得する」ということを、母語と異言語との間で、科学的に等価的に処理しようとするものである。そのため、人間と言語との関わりのメカニズムが科学的に検討されることになった。そして、コンピュータによる等価変換処理は、解明されたと思われる知識をベースとした自然言語処理から始まったが、満足な処理が出来ず、現在では、さらに統計確率を援用して処理する手法が盛んである。しかし、この方法もデータが多くなればなるほど精度が落ちるという現象に直面している。もちろん「雑音」を排除して処理することもできるようになっているが、それでも「人間による正しい言い換え」(対訳データ)にはほど遠い。

「正しい等価的言い換え」は、原言語の表層情報が正しく分析・分類されているだけではできな

い。もちろん、目的言語の表層構造も正しく分析・分類されていないといけないが、その上に、言語の情報伝達構造の等価的対応関係が正しく規則化されていなければならない。たとえば、

やがて森が切れ、海が見えてきた。

という日本文がある。この表層情報は曖昧である。人によっては「やがて」を全体にかけて「やがて、森が切れ海が見えてきた」と解するだろうし、また、中には「やがて」を「森が切れ」だけにかけて「やがて森が切れて、海が見えてきた」と解する人もいるだろう。またある人は「やがて（森が切れ）海が見えてきた」と解するだろう。「形態素解析・係り受け解析(JUMN/KNP)」にかけると、「やがて」は全体にかかっていると分析し、「やがて森が切れて、海が見えて来た」と「て」を加えると、「やがて」は「森が切れて」にかかると分析する。機械翻訳はその結果に応じて、

The forest cuts and the sea has come into view before long.

The forest will cut before long, and the sea has come into view.

というような英語符牒の言い換えを出してくる。しかし、プロの翻訳家はそのあいまいさも含めて、

やがて森が切れ、海が見えてきた。

Before long there was a break in the wood, and the sea came into view.

のような「言い換え」をする。言語変換が正しくなされるためには、このようなプロの対訳を集積して、「言語の伝達構造の等価的対応関係」を分類・法則化することが必要である。しかし、この「伝達構造の等価的対応関係」の見極めと分類・法則化が難しい。

日本語から英語への変換において、一個の「単位情報文（一つの動詞と一つ以上の名詞からなる

文）」は理論値としては98%ほど正しく変換できるそうである（池原悟氏の2005年の論文）が、理論値を下げているのはおそらく等価変換しにくい「○は□が△」という日本語特有の情報伝達構造であろう。

「○は□が△」に使われる助詞の「は」と「が」については、数多く本が出版されているばかりでなく、ネット上にも説明・解説が無数にある。また、この「は」を含む日本文の英語への変換についても多数の説明がなされている。しかし、説明は、たとえば、「名詞文、形容詞文の場合、主語は「は」であり、動詞文の場合、主語は「が」である」とか、「‘は’が主語の場合は陳述文であり、‘が’が主語の場合は命題文である」とか、また、「‘は’は関心の対象をあらわす」など、日本語研究・日本語教育の見地からの分類・解説が中心である。

「英語との対応関係」ということを前提に解説していてネット上で読むことのできるのは、宮崎正弘氏（新潟大学名誉教授）の主宰する「(株)ラングテック」くらいしかない。この「は」を「英語との対応関係」を意識して詳細に解説したのは三上章であろう。彼は「Xハ」はだいたい「Xニツイテ言エバ」の心持ち（三上章『象は鼻が長い』p. 8 くろしお出版, 1960/10/30）と説明し、さらに、『日本語の構文』（p. 41 くろしお出版, 1963/12/20）で

X wa ~ ≡ As for X, it ~

と英語に言い換えている。機械翻訳では、この言い換えを参考にしたいのであるが、As for...構文の使い方がよくわからないまま利用したらしく、たとえば、

紅葉は奈良がよい。

As for the autumnal tint, Nara is good.

この店は牡蠣がおいしい。

As for this shop, the oyster is delicious.

というような奇妙な言い換えが出てくる。

このように「伝達構造の対応関係」を法則化するのには非常に難しい。そこで、日英両語の等価翻訳を試みた過去30年の仕事の中から短い例を探して、英語への等価変換を前提にして「○は□が△」という日本文の情報伝達構造を分類してみた。次のような六種類に分けることができる。

A. 英語の S+V+O で対応できるもの

A 1 「あたし、夜景、大好き。」

“I'm very fond of this kind of view at night.”

「(私は) すこしはペルシャ語がわかりますから、・・・」

“I know (just) a bit of Persian,)”

A 2 ハム、ベーコン、ソーセージは私たちがここで作っています。(～製造所)

Ham, bacon, and sausages we make here.

B. 英語の S + HAVE + O か、S + V(be) + adj. (+ prep. + N)で対応できるもの

B 1 少女は肌の色が浅黒く、目がきつかったが、おとなびた表情をしていた。

She had a rather dark skin and sharp eyes but a more adult expression.

B 2 私は母に似て虚弱だった。

I took after my mother in having a weak constitution [having poor health].

I resembled my mother in being delicate [sickly; weak]

彼はもともと体力がまるでないタイプだった。

He was completely lacking in [he completely lacked] stamina [physical strength] at the best of times [by nature]

彼は身体が丈夫である。

He is strong in health.

その子は体が弱かった。

The child was in delicate health.

C. 「時・場・事・物の名詞+は」は「～には・では」の意味で、英語では副詞句で対応するもの

C 1 秋はワシントンが美しい。

Washington is beautiful in autumn.

酒の肴はスルメがいい。

Surume is most suitable for sake.

C 2 秋は鈴虫が鳴く。

Crickets ring bells in fall.

[参考]

このように分類すると、

花は桜木、人は武士。

The cherry is among flowers, the samurai is among men.

春は曙

Dawn is most beautiful in spring.

も、深層に「○は□が△」が潜んでいることがわかる。「春は曙」に関しては、Ivan Morris (The pillow-book of Sei Shonagon, 1991, Columbia University Press, New York) が、In spring, it is the dawn that is most beautiful. と翻訳している。In や it is が弱音なので「春(spring)は曙(the dawn)」と日本語のイメージ順である。上田敏の『海潮音』の中の「春の朝」は Robert Browning: Pippa's Song: The year's at the spring./ And day's at the morn; Morning's at seven.... を訳したものであるが、「時は春、日は朝、朝は七時。」としている。それから、「今は昔」も深層に「○は□が△」が潜んでいると思うが、単に「時」を示す副詞と解され、斎藤大和英辞典では「いまは昔」を once upon a time と訳している。また、川端康成 現代語訳、ドナルド・キーン 英訳、講談社インターナショナル (1998/03/20) では、

いまはむかし、竹取の翁といふ者ありけり。

Many years ago there lived a man they called the Old Bamboo Cutter.

と訳している。

さすがに、三上章は、「は」は「に・で」を兼務すると解説している。(『象は鼻が長い』第1章「ハ」の兼務 pp.35-47) 日本語という観点から言えば、

助詞の「は」はいずれも「関心の対象のピックアップ」であるが、ここで重要なのは、「伝達構造の対応関係の法則化」という新しい観点を導入することによって、C. のように、英語では副詞句になる場合が含まれているということが意識されるということである。

イギリスではターナーとかコンスタブルの風景画が有名であるが、なぜ彼らは風景画を描き始めたのか。フランドル地方の空はどんよりとしていて画家たちは関心を抱かなかった。ルネッサンスになって、フランドルの画家たちはイタリアへ赴く。彼らは地中海に来て、空の蒼さ、光の輝き、雲の流れに気づく。なんと空は明るく美しいのだろう。フランドルに帰った彼らが描く絵の中に空や雲や光が現れる。オランダの風景画の始まりであり、それはイギリスにも渡っていく。新しい視点を得ると同じ物が違って見えてくる。

秋の夜は、はるか彼方に、
小石ばかりの、河原があつて、・・・

ああ、「秋の夜は河原がはるか彼方にある」は「○は△が△」であつて、「秋の夜は」は C. に分類されるものなのだ。

3. 実装—中原中也語を自分語に変換して納得する

オーガナイザー（小川・小方両氏）の「実装作品を」という注文に応えて、中原中也の「一つのメルヘン」を勝手に自分語に言い換えて納得してみせて「実装」とする。

「一つのメルヘン」

（見上げると）（闇が深い）秋の夜（に）は、はるか彼方（の夜空）に、
小石（のような星）ばかりの、〈天の川の〉河原があつて、
それに（太陽の）陽は、（まるで）さらさらと
さらさらと射して（星を輝かして）ゐるのであり

ました。

陽といつても、（それは星に当たって光っているの）まるで珪石かなにかのやうで、

（瞬く星たちは）非常な粉末の個体のやうで、
さればこそ、さらさらと
かすかな音を立ててもゐる（かのように感じられる）のでした。

さて小石の（ような星の）上に、今しも一つの（秋の羽うちからしたアゲハ）蝶（のような僕）が（よろよろ）とまり、
淡い、それでいてくっきりとした
影を落としてゐるのでした。

（「いやいや、これは夢だ、幻想（メルヘン）だ。」）
やがてその蝶（のような僕）が（僕の涙で）みえなくなると、いつのまにか、
今迄流れてもゐなかつた河床に、（涙の）水は
さらさらと、さらさらと流れてゐるのでありました・・・・・・

この詩は美しいが哀しくて寂しい。

詩人の役目は、物語を喚起できるようにイメージ点を揃えることであるが、最後に、もう一つのキーワード「認知」について言う。「聞いてわかる、見てわかる、読んでわかる」ということは、このように「相手語を勝手に補って自分語に変換して納得する」ということで、この操作は無意識のうちに日頃からやっていることである。

4. おわりに

フランス派英文学研究やロラン・バルト流の読みのテクニックなどを通して学んだ「精読」に、機械翻訳の仕組みと、岩垣式納得を重ねた「勝手読み」である。以前、グループで「勝手読み」をテーマに議論していたとき、研究会の終了寸前に内海彰氏が「勝手読みでない読みはあるのか」と突っ込んで来た。いい質問だと思って「そう、勝手読みでない読みはない」と答えたとき、会場側

から時間だから出て行ってくれと追い出されてしまった。続けて言いたかったことは「でも、勝手読みと意識した勝手読みと、意識しない勝手読みとは異なる」であった。ここに追加しておく。

参考文献

- [1] 安原喜弘著・編『中原中也の手紙』(講談社文芸文庫, 2010/04/09)
- [2] 池原悟「非線形性に着目した言語表現モデルと重文と複文に対するパターン辞書の開発」(第11回 LACE 研究会(2005.12.24-25) pp.1-2)
- [3] 岩垣守彦「一つの名詞に二つ(以上)の動詞に関わる表現について—日英両語の等価変換における「内的連結(inner connections)」の処理」(2012/09/28「ことば工学」(神奈川大横浜キャンパス))
- [4] 岩垣守彦「「単位情報」順に処理できない「複数単位情報文」の変換について」(2012/12/08「思考と言語」研究会(早大))
- [5] 岩垣守彦「「単位情報」順に処理できない文の変換について考える」(2012/12/22 LACE 研究会(機械振興会館))
- [6] 岩垣守彦「単位情報順の変換に関わるいくつかの問題点」LACE(言語・認識・思考)研究会・第18回年次研究会 2013/12/23(早大)
- [7] 岩垣守彦「翻訳について考える 2—連結態としての準動詞」(2014/06/21)「思考と言語」研究会(早大)
- [8] 岩垣守彦「準動詞を含む否定文を前から単位情報順に処理する」(2014/10/11)「思考と言語」研究会・機械振興会館)
- [9] 岩垣守彦「英日変換における訳出順序の諸問題」(2014/11/29 LACE 研究会・桜美林大四谷キャンパス)
- [10] 岩垣守彦「英日・日英相互等価変換の夢を追って」(2015/02/27「思考と言語」研究会, 京都光華女子大)
- [11] 岩垣守彦「「春は曙」などの言語変換に関して」(15/02/27-28(「ことば工学」研究会, 京都光華女子大))
- [12] 大岡昇平『中原中也』(講談社文芸文庫, 1989/02/10)
- [13] 小海永二編『現代詩の解釈と鑑賞事典』(旺文社, 1979/03/01)
- [14] 小林秀雄『作家の顔』(新潮文庫, 昭和36年8月20日)
- [15] 講談社版・日本現代文学全集68『青野季吉・小林秀雄集』(講談社, 昭和37年12月19日)
- [16] 新潮社日本文学アルバム『中原中也』(新潮社, 1985/05/20)
- [17] 中原中也『中原中也全詩集』(角川ソフィア文庫, 平成19年10月25日)
- [18] 長谷川泰子・村上護編『中原中也の愛』(角川ソフィア文庫, 平成18年3月25日)
- [19] 中原フク述・村上護編『私の上に降る雪は—わが子中原中也を語る』(講談社, 1973/10/12)
- [20] 吉田精一・分銅惇作編『近代詩鑑賞辞典』(東京堂出版, 1969/09/15)
- [21] 米須興文『ミメシスとエクスタシス——文学と批評の原点』(1984) 東京, 勁草書房)